九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アメリカの保守的小教派 : アーミシュとハッターライト

古野, 清人

https://doi.org/10.15017/2543257

出版情報：哲學年報. 17, pp.45-82, 1955-03-15. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

アメリカの保守的小教派

――アーミシュとハッターライト――

古野清人

アメリカには現在三百近くの小宗教團體があり、しかもその大部分が七千人以下の信者を有しているにすぎない。その大部分は教義や行事がかなり奇異の感を與えるものであるが、詳細はいまだ調査されていない。しかしその信者のパーセンテージはこゝ三十年間に、ひろく知られている大宗派に比較して著しく増加している。現代アメリカの宗教生活を理解するには、これらの小宗教團體についても十分な知識をもつことが必要である。これらの小教派はいくつかの異つた型に分類しうる。クラークはその著『アメリカにおける小教派』で、これらを悲觀的またはアドヴェンティトス教派、迫害者的または主觀主義的教派、カリスマ的またはペンテコステ的教派、共産主義的教派、律法的または客觀主義者的教派に分類して檢討している。このような分類は便宜的なもので、一つの宗教運動は必ずしもこの中の一つの框に限定されうるものではない。これらの小教派はアメリカの進歩した機械主義の下で醸成された特殊な新興教團のみを含むだけでなく、ヨーロッパから移住してきた保守的なキリスト教的信仰者の教派も含んでいる。その中にはもちろん混成型の教團も少くないが、しかしキリスト教またはたまにはユダヤ教が骨子をなしているところに、日本の夥しい新興宗教運動に見られるような佛、神、基あるひは道教などの混淆からなる雜多性はすこぶる清算

されているといえる。これらのいわば分派的宗教運動が何が故に發生しあるひはまた發展しているかの研究は重要な社會學的課題である。アメリカにも貧乏人は多い。これらの小集團の多くは見捨てられた貧者の逃難所であるとの見解も成立するであろう。あるひは情緒的に飢えた「淋しい群集」の人々の逃難所ともいえるであろう。アメリカの社會的、經濟的またはひろく文化の背景と關連させて、これらの起原と形成とをある程度までは說明しうるであろう。しかし、今はこの總括的な問題に立入らないで、わたしが昨年自ら視察する機會をえた二つの保守的な小教派、アーミシュとハッターライトについて略述し、その宗教的社會的の意味を評價するに滿足したい。

アーミシュもハッターライトもともにアナバプチストの宗教運動の一環を構成するものである。これらの教派は新大陸アメリカの所產ではなくて、舊大陸ヨーロッパから渡來したものである。しかしこの新大陸において故國における迫害の歷史に對比して大きな宗教的自由を享受し、教派の人口も著しい比率で增加しているのである。

十六世紀初頭のヨーロッパの宗教改革運動では、アナバプチストはルーテル派やツウィングリ派とともに多くの信者を擁した、人間の自由を叫ぶ三つの異つた宗派であつた。そして初期のアナバプチストの教會組織はカルヴィニストのそれに先んじ、かつまた影響を與えたといわれる。したがつてまた後のバプチストやクェーカーもまたその精神的影響を蒙つたといえるであろう。ピュリタニズムはスイス、ドイツ及びオランダのアナバプチストから直接に多くの靈感を克ちえたと推定することによつて容易に理解できるであろう。

「アナバプチストは、國家＝教會の制度、子供の洗禮、信仰に關しての强制、官職や戰爭への參加、一般には教會至上主義（ecclesiasticism）を放棄することを力說した十六世紀の宗教的過激派である。」[1] アナバプチスト（再洗禮者）とは、教會が强制的にメンバーとするために行う幼兒の洗禮（浸禮）を否認して、自由意志による信仰者として

受洗するのに對して、その反對者たちが再洗禮者（rebaptizer, Wiedertäufer）と呼んだニック・ネームである。彼らの間では教義や行事はよく似ていてしかも子供の洗禮を否定することで一致していたが、自らはおのおのスイス同胞團（Swiss Brethren）、ハッターライト、メノナイトなどと自稱しまたは呼び合つていたのであろう。彼らの決定的なプログラムは、謙虚に忠實に主の前に歩み行きその戒律を罪科なしに守ろうとする、イエス・キリストの罪深い弟子として自由な組合を創設することにあつた。しかし、殊に教會と國家との密接な關係を拒否し、また子供の洗禮を否定する急進的な行動は強大な反抗をキリスト教國の間で惹き起した。組織化されたキリスト教國は各國家と手を携えて、アナバプチストを地上から根こぎにしようとし、かくして行われた相つぐ死の迫害は大いにその目的を貫徹したのである。

アナバプチストは彼らの教會生活と秩序との完全な型を作りあげる前に早くも反對と彈壓とに逢つた。一五二九年のシュピーアの國會では、幼兒を洗禮に出さない者はすべて直ちに死刑に處する旨の布告が發せられた。この峻烈な政策に、皇帝もローマ教會も大部分のプロテスタント指導者たちも同意した。この背面に潜んだ主な動機は、神學または教會學についての明瞭な思想からよりも、社會不安の怖れと僧侶の權威を保持するためである。教會と國王とは組んで、新興の左翼的宗教改革の運動を彈壓し、多くの指導者を極刑に處した。僅かの殘存者たち、オランダにおいてはメノナイト、スイスのスイス同胞團、そしてモラヴィアにあつてはハッターライトの一部が辛うじて餘喘を保つたにすぎない。

アナバプチズムは、その教義や行事の傾向からみて本質的にはプロテスタント宗教改革の論理的な歸結である。しかも彼らに加えられた執拗で殘忍な迫害にもかゝわらず、アナバプチストは暴力に對する無抵抗の信條を持續した。

それはむしろ均衡を失つた荒唐で狂熱的な運動ではなかつた。それは聖書の本文に絶對的に忠實であるために、他のプロテスタントの諸集團よりもつと熱心に宗教ならびに教會の傳統を破ろうとした努力であつた。そしておそらくこの理由からして、今日キリスト教國においても、十六世紀におけると同じように革命的な運動、一種の邪教と忌避されているのであろう。

現代においてもアナバプチズムの傳統をはつきり保持して生き續けている多くの宗教的共同社會がある。ペインはこれを四つに分類している。[2] この見解は妥協であると思うから、これにしたがつてさらに補足的な敍述を加えておきたい。

(一) メノナイト (Mennonites)。これは運動の指導者であるメノ・シモンス (Menno Simons, 1496–1561) の名から出ている。彼はもとローマン・カトリック僧侶であつたが、福音上の同心をなして當時の宗教改革とカトリシズムのいづれの傾向にも對抗した。彼は神學ではルーテルそのほかの改革者たちとあまり異つてはいなかつたが、彼らの教會についての考え方、殊に教會が國家と結んでしかも國家に倚存していることに反對した。また教會はもつと完全に俗世界から分離することを提唱した。この後者の原則は今日でも生かされている。彼は一五三四から一五三五年のミュンスターにおけるアナバプチストの大反亂から二十數年の後にかつて强國であつたオランダ地方のアナバプチズムを再建した。そしてスイス・ブレスレンと同じように武器と官職とを拒否した。十七世紀から十八世紀にかけて、オランダのメノナイトは有勢で影響を及ぼしていた。今日ではオランダだけでなく、ドイツ、ロシア、アメリカ合衆國及びカナダに分布している。しかし大陸では、宗教的ならびに政治的に戰爭に對する無抵抗、あるひは絶對の平和主義を壓迫されて放棄した。それでこの無抵抗の教義を維持するため、オランダ、ドイツから殊に十九世紀に多くア

メリカに移住したのである。アーミシュもこのメノナイトに屬する。彼らは早くからしかも相ついでアメリカに移住してきている。メノナイトは「歴史的平和教會」とも呼ばれている。

(二) ブレスレン (Brethren)。十六世紀アナバプチストの後繼者である Taufers や Dunkers と呼ばれているドイツ・バプチストたちの小集團が一七一九年にクレフェルトを去つて、ペンシルヴァニア州フィラデルフィア近くのジャーマン・タウンに定着した。そして増大してアメリカのメノナイトと同じくいくつかの集團に分離した。全體で二十萬の信者がいるという。これも「平和教會」であり、成年者に洗禮を施している。

(三) ハッターライト (Hutterites)。十六世紀におけるヤコブ・ハッターを創設者とする。十七世紀にハンガリーに逃れ、そこからトランスシルヴァニアを經て南ロシアに入り、一八七四年から小集團がアメリカに移住することができた。現在では合衆國とカナダにいる。これについては後に詳しく述べる。

(四) シュウェンクフェルディアン (Schwenckfeldians)。カスパール・シュウェンクフェルト (Caspar Schwenckfeld von Ossig) の流れを汲む小教派で、一七三四年にシレシアからアメリカに移住してきた小集團である。現在ペンシルヴァニア州にいる。

これらのアナバプチズムの諸教派は數世紀にわたる明白な古風さと保守主義とを堅持しているが、しかしまた著しい抵抗と彈性の力を内包している。そしてこゝに述べるアーミシュやハッターライトに見られるように、新大陸の新らしい自然及び社會環境に適應しながらも、その宗教的傳統主義を維持している。彼らの共同社會はめまぐるしい現在のアメリカン・テンポの中にあつて、若干の文化的脱皮をしつゝも數世紀の舊慣を保有し續けている。それはたしかに「變り行く川の中の確實と安全との島」である。

(1) John Christian Wenger; The Doctrines of the Mennonites. Scottdale, Pennsylvania, 1952, p. 1.

(2) Ernest A. Payne; The Anabaptists of the 16th Century and Their Influence in the Modern World. London, 1949, p. 16-18. クラークはすぐれた著書『アメリカにおける小教派』の中で、ハッターライトを、「多くのメノナイト集團の一つ』と記しているが、これは正確ではない。(cf. Elmer T. Clark; The Small Sects in America, Revised Edition. N. Y., (1937), p. 185.) すでに自らドイツ系のメノナイトであつてハッターライトのすぐれた研究者として知られた John Horsch (1867-1941) は『ハッターライトはメノ・シモンスの影響に接觸しないまゝでいた」と記している。(cf. John Horsch; The Hutterian Brethren 1528-1931. A Story of Martyrdom and Loyality. Goshen, Indiana, 1931, p. 6.)

(一) アーミシュ

アーミシュはメノナイトの一派で、正確にはアーミシュ・メノナイト (the Amish Mennonites) と呼ばるべきであるが、略してアーミシュ (the Amish) で通用している。("Amishmen" と呼ばれることもある。) ヤコブ・アモン (Jacob Ammon) が創設者である。十七世紀末のヨーロッパで、メノナイトの内部で初めて紛爭が生じた。アモン (またはアマン) は集團内の訓育が弛緩してきたことを指摘し、メノ・シモンスらの教訓をそのまゝ守ることを主張した。彼は殊に服從しないメンバーは追放することを力説した。一六九〇年に二人の司祭、アモンとブランクとはスイスや南ドイツのメノナイトの狀況を視察し、彼らが弛緩していると告發した指導者たちに出頭を要求して批難に對して回答することを命令した。召喚された人々は出頭しなかつたので、アーミシュ派の指導者たちは彼らを追放に處した。ところが逆に彼らもまたアモンらを追放した。かくして一六九八年には分離は決定的となり、その後にも妥協が成立しないまゝでいる。

アーミシュは一七二七年ごろにアメリカに移住してきて、一七四二年にはペンシルヴァニアの今のバークス郡(Berks County)に強力なセットルメントを設けた。今では大多數のアーミシュは同じ州のランカスター郡(Lancaster County)にいる。またペンシルヴァニア、オハイオ、インディアナ、カンサスなどの諸州の各地に散在している。彼らはまた四つまたは三つに分派しているといわれている。それでブレードゥンのように、二つのアーミシュ團體しかないというのは行きすぎであると思うが、しかし疑ひもなくこれらの二團、舊派アーミシュ・メノナイト教會(the Old Order Amish Mennonite Church)と保守的アーミシュ・メノナイト教會(the Conservative Amish Mennonite Church)とが最も有勢である。

「舊派」が最も強力である。一八五〇年頃に、屋内かあるひは外部の流れる水の中で洗禮を施すかについてアーミシュの間で論爭が生じた上、なお同じ頃に家庭でオルガン、讃美歌集を使用させるか、宗教的な勤めに男女を隔離するかの是非が問題となつた。一八六二年にオハイオ州のウェーイン郡(Wayne County)の大納屋で會議が開催されたが、立場の相違を整調できず不成功に終つた。それから後にきわめて保守的な立場をとつたこの派が「舊派アーミシュ」として知られるようになつた。彼らは嚴密に初期からの信仰と行事に固執しようとしている。彼らはほとんど教會家屋を持たず、會合を家庭または納屋で開いている。説教にはドイツ語を用ひ、夕方の勤めや日曜學校などはやつていない。また高等教育には反對する。牧師は給與されないし、くじ引きできめられる。訓育に從わない者は追放するという嚴重な掟を守つている。彼らの服裝はきわめて質素で、外衣やチョッキにボタンでなくてホックを用ひている。それで"hook-and-eye"メノナイトと呼ばれることもある。彼らは大部分が農村に生活している。そして一般に非常にすぐれた農夫であると認められている。

保守的アーミシュはその名にもかゝわらず實際はアーミシュ集團では少しはモダーンな一派である。「舊派」ほどに機械文明に對する反感と抵抗は強くないところが特徴である。またほかの教會に對しても舊派よりは友愛的である。わたしは一九五四年の五月、オハイオ州の首都コロンバス郊外のアーミシュ集落を見學する機會に惠まれた。これは在日中に知己をえたオハイオ州立大學のすぐれた文化人類學者ハバート・パシン氏の心からの御盡力に負うものであつた。しかも同氏は積極的に通譯の勞をとつてくれた。

五月一日(土)。わたしは十時に約束通りホテル・デシュラー・ヒルトンの前でパシン氏が車で迎えにきてくれるのを待つ。定刻に訪れてくれた氏は、アーミシュの研究者であるグード(Harold A. Gould)君が一女性と同伴して行きたいとのことだがとの話をされたので快諾して迎えに行き同乘する。グード君はフルブライトで近く印度に調査に赴く由である。印度の服裝をしたミス・タラティはパーシイ教徒に屬し、グード君のガール・フレンドであろう。車中で同君はアーミシュには三つの型があると語つた。(一)舊派、萬事をバイブルの通りに行かうとする。黑色の幌馬車に乘り、男はあごひげを生やし、古い型の服を着てる。(二)ビーチー派、これは機械は採用しても昔の慣習は殘さうとする。(ビーチーとは人名であつたと記憶している。)(三)保守的アーミシュ、これは新らしい技術にある程度まで適應しようとする。さらに同君の語るところによれば、行かうとする同じ所にメノナイトもいて教會もある、そしてアーミシュが大部分農夫であるのに、メノナイトにはビジネス・マンもいる。舊派には子供が多い、しかも子供は農場で働かせることができる。しかし新らしい機械を採用していくと、勞力が餘つてくる。そうなれば子供をコロンバスを初め州内または州外に出す。その收入は家族に入つてくる。ところが都會に出た次男三男は都會化してきて歸つてきても舊派の生活樣式は守れない。アーミシュは一般に反戰的で、政治に對する關心はうす

く立候補はもちろん投票もしないと。彼らは孤立した宗教的共同社會に住んでいるのである。パシン氏によれば、彼らは世界のアーミシュとは同一感を有しているが、共和國と自分らとは對立した別箇のものだと考えている。

われわれは雨の中を木々の青める平原の道路を走つてウォーシントン（Worthington）をすぎる。この町は一八一〇年にできたもので、ニューイングランドの古い町をまねたものだと、今も殘つている古い家々をパシン氏は教えてくれる。東部のレキシントンで見た初代開拓者の古い家屋によく似ている。およそ二五哩走つた後、プレーン・シチー（Plain City）につく。千七百人位の人口の田舍町である。質素な町という意味らしい。最初アーミシュはこの地にいたのであるが、こゝから近くの農地に入り、他の者で占められた。あたかも土曜であるので、日曜は外出できないから、この午後に買出しに古風な黑い馬車で男女が來ている。男はあごひげを生やし女は黑いボンネットを被つている服裝はきわめて異樣に映じる。裏町の一器械修理工場に訪れてみるに、アーミシュは聖書にはゴム・タイヤなどは記してないから、新らしいゴム・タイヤを外して木製のに代える由で、その見本を示された。パシン氏の話によれば、人のよい職工が、improved Amish"—保守的アーミシュを指す—は豊かであるからよいお得意さんである、考え方は變であつても良い土地を所有しているし、技術にも巧みで、家族全體でよく働くとほめていたそうである。

こゝから農地に赴くある道端でスイス・チーズと記してある家に入つてみると器械でチーズを製造している。新らしいのを一ドル拂つてパシン氏が購つたのを、わけてもらつて賞味してみるに、輕くて仲々おいしい。これはメノナイトに屬する人の經營になるものだという。近くにメノナイトの教會があるので下車して、煙草に火をつけかけるとパシン氏に制せられた。禁煙の境内である。新らしい質素で清潔な教會である。一八〇名のメンバーで構成

され、牧師は職業的である。彼らの所有地（耕作地）は平均約一六〇エーカーあるとのことである。この地方には友情の關（Amity Pike）など古い名の場所が殘つている。

われわれは大きな農地の傍にある農家を訪れた。あごひげを生やした赭顔の健康にあふれた人物に快よく屋内に招き入れられた。ヨーダー（Benn Yoder, 1910——）氏である。部屋は質素ではあるが大きく立派に整頓してあつて、日本の農家などとは比較にならない。彼はこの土地に生れたが、一家は一九〇〇年頃に百哩ほど離れた同じオハイオ州から移住してきた。彼は保守的アーミシュである。紹介された夫人は西の方の出身で、舊派アーミシュである。品のよいドイツ女性の顔をし、眼鏡をかけた神經質らしい女性である。自分たちはドイツ語を用ひるが、方言であるという。ヨーダー氏はハッタライトのことは知つているが未だ會つたことはない。部屋には電燈なしにランプが用ひられている。石炭ストーブもある。窓側には草花の鉢が數多く並べてあるが、どれにも花が咲いていないのは不思議に感じられた。

ヨーダー氏によれば、こゝのハイウェーには百軒ほどアーミシュがいるが、皆ドイツ語を使ひ英語の話せない人も少くない。教會ではドイツ語でお祈りする。氏は二四六エーカー（一エーカーは四段二十四歩餘）を所有しているという。一般の平均は一〇〇エーカーらしい。この家には自働車もあり、また古いコーチもあるが、これは離れた別棟に住んでいる雇用人が使用している。夫婦と頑强な男雇用人一人で、大きな農場を經營しているわけである。雇用人と二人で建てたという大きな納屋もある。また恐慌に備えて、小麥を貯藏しておく大きな鐵製の圓筒も二つ新設されている。アーミシュは原則としては軍隊に入ることはできないのであるが、近頃では入隊している。陸軍に入つて印度に赴き、そこで印度婦人と結婚して歸つてきてコロンバスで勤めている者もあるが、村に歸つてきて

も何の差支えはあるまいとヨーダー氏は進歩的な立場である。自らは反戰主義者ではあるが、青年が軍隊に入りたいなら致し方がない、「教會」は各人の良心を決定することはできないからだという。選擧の投票には反對しないが、妻は反對であると。またテレヴィジョン、ラジオなどは原則として反對しないが、妻は子供に惡い影響を與えるからと反對する。たゞし夫妻の間に子供はない。ヨーダー氏は仕事については自己主張を拄げないが、そのほかのことでは舊派の夫人と妥協している。彼はその教派の中では進歩した思想の持主ではあるが、それでも教育については、義務教育は仕方なしにやるが、百姓としては小學校以上の教育は要らないとの見解である。農學校も不要ではないかと考えている。何よりも經驗が大切である。百姓は金持ちになれると聞いて農學校に入學して卒業したが失敗した者がいると力說する。ヨーダー氏は新聞も讀み農業の研究もし、新らしい肥料を用ひて効果をあげている。それでも周圍の人々は新肥料を用ひない由である。こゝではハイ・スクールに行く者は稀である。しかし、今日では青年が外部とのコンミュニケーションを持つのを熱望しているとヨーダー氏は認めている。わたしたちは笑顔で送る彼氏と別れて、餘り遠くないプレーン・シチーR・D・2のアーミシュ一家を訪れた。

土で汚れた手の主人と握手して庭から屋内にいる。主人はビーチー（Jonas E. Beachy, 1092—）氏である。夫妻ともこの土地の生れである。夫人はミズリー州に行つて日本人の醫者に手術して貰つて全快したという。そのせいかすこぶる好感をもつているように印象づけられた。父はこの地に一八九八年に新らしい耕地を求めて來た。現在は一四五エーカーを所有している。平均よりは少し高い。ほかに一二〇エーカー借りて一家で經營している。子供は男六名、女一名であるが、男の三名は結婚して別居している。殘りの三名のうち、二名は同居しているが、ほかの一名は反戰主義者であるから、（入隊しない代りの義務として）シンシネッチ市の病院に勤めている。二ケ年

間の義務的勤務であるが、サラリーは給與される。女子一名は家にいる。自宅で子供にドイツ語を教えるのが慣例である。祖先は南ドイツから來たのであろうと。夫人の甥がこの大戰中にドイツに赴いて同じ言語を話しているのを知つて歸つてきた。夫妻とも「舊派」に屬している。牧師は任命されるのであるが、サラリーはない。それで農業はやめない。任命されたら生涯勤めなければならない。こゝではたれも自動車を用ひない。またトラックを農業に用ひない。その點ではメノナイトが進歩的であるという。われわれがさきに訪れたメノナイト教會の牧師は貧乏で老年なので、アーミシュも少し助けていると。こゝでは公立學校にしばらく子供を入學させていたが、その後學校が擴大されラジオなど使用して自分たち舊派の感心しないことが多くなつたので、一九四六年に教會に附屬した學校を新設したという。

こゝには舊派の組合（congregation）は三つある。別に教會の建物があるわけではない。全體で一二〇軒から一二五軒ほどで、夫妻の屬している組合が最も多く約五〇軒から成つている。「教會」ではドイツ語のバイブルを讀み英語のとも比較する。日曜だけでなく臨時にも行う。ほかから牧師が訪れてきた時などには、順番に教會の役を引受けてその家で行つた。（この近くの部落にルーテル派の人々から成るのがあり、そこでもドイツ語を用ひているという。）こゝでは結婚はアーミシュ間で行う。昔から結婚すればすぐ別居した。新婚者を助けてやる方法は狀勢によつて異る。土地を買うてやることもあり借用することもあり、あるひは器具を購入してやることもある。土地を分配することは稀である。本來は見合ひ結婚であるが若者は自由結婚にひかれている。教會に集つた後に馬車で自宅に送つてやりなどして交際を深めていく。長男が後繼するわけではない。父が死ねば、その農場を賣つて金を分配するか、一人が買うて兄弟に支拂うかである。男は百姓になるのであるが、土地が少くなれば他に移動する。さ

きにヨーダー氏のところで聞いた、印度婦人との結婚の件は聖書に記されていることによつて反對であると夫妻は語つた。

舊派アーミシュでは、禁酒、禁煙でビールでも飲めない。酒を飲んだら告白しなければならない。それでも續けていれば、部落の會議にかける。その際に贊成者が本人を含めて二名であれば共同社會としては、その行動を止めえない。洗禮は子供のときにしないで、自らの意志で一六歳から二〇歳の間に行う。もちろんカトリックにおけるような代父、代母はなく、本人が牧師に申出るだけである。教會でたゞ牧師が三度水を頭の頂につけ、その度毎に父、子、聖靈と唱うるだけである。一人で赴く。自らの救濟はひとりできめなければならない。家族は生れたときに命名するだけである。臨終に牧師が來るのは慣例ではない。しかし來て貰つて告白しても差支えはない。姦通を犯した者、泥醉者、および牧師の命に從わない生意氣な者は共同社會から追放する。盜賊や賭博者の場合も同じであるが、これらは前例がないと。

男は結婚後はロひげ無しにあごひげを生していなければならない。このことは聖書にも出ているので、嚴守しなければならない。こゝでは結婚の二・三週間前にたてる。夫人は結婚のときくすぐつたいだろうといつて皆を笑はせていた。これはアーミシュの男性を外部の人と區別する特徴の一つである。女性はいつも帽子をかぶつていなければならない。暑いときには少し輕い帽子に變える。外出には必ず黑いボンネットをかぶつて行く。子供のにはブルー色のもある。各人が縫うてつくる。若い娘さんが持つてきて見せてくれたボンネットには、厚紙が入れて型がくずれないようにしてあつた。萬事にけばけばしく飾らない質實さを守つてきているが、それでも若い女性は派手なことをしたがる。母に反對して從わない者も出てきている。色はどの色でも用ひて構わない。花作りなどは禁ぜ

られてはいない。自分たちは大好きだという。宗教的立場から食べていけない食物はあまりない。聖書に出てくる、馬肉はたべない、農業との關係が深いからである。神聖な日は格別にない。日曜は働いていけない休日ではあるが、搾乳などの必要な仕事だけはしていると。

教育についての夫妻の意見は、要するに義務教育以上の要なしというにつきる。醫者などになるのは悪いことではないが、そのために學校に行くことは不可という。自分たちの宗教から離れるからである。子供たちが舊派アーミシュの埒内に止つていてほしいのである。夫妻はまた舊派の間では、貧富の區別は絶對に無いという。彼らは不幸な者は必ず助ける、耕地がなければ分配してやることもあると。わたしはこゝにも後のハッタライトの組織の大特徴である《community of goods》觀念の萠芽を見る氣がした。パシン氏に指摘されて氣付いたのであるが、アーミシュには日本農村の隱居家に相當する「祖父の家」(grandfather house)が主家の横にあるのは興味深かつた。ビーチー夫妻はまた國内旅行してカナダまで赴いたことがあると語つた。

メノナイトの中でもユニクな、クラークのいう最もpictureseqeなアーミシュは、[1] カトリック及びプロテスタント諸教會の相つぐ迫害に耐へかねてすでに一七三〇年からアメリカに移住してきている。そしてその後の移住者の群も含めて次第に增大し、一八州に亙つてセツルメントを伸ばし、二〇〇の教會地區を含み、公宣した信者が一九五二年において一五、八八〇といわれる。ガットキンドによれば、宗教的立場からする産兒制限に對する强い反對及び農村共同社會のために大家族を經濟的に利用することがこの教派の生長に寄與した。そして最大のセツルメントはオハイオ州のホームス郡(Holmes County)のそれで、次はインディアナ州のエルカート郡(Elkhart County)のそれ

である。これは一六地區に分れていて、およそ一、七〇〇人の信者を擁している。ガットキンドはその現地調査を行つて、結果を報告している。それを抄略して附記しておく。(2)

舊派のアーミシュでは、部屋は極めて清潔でしかも家具は非常に簡單である。カーテンが無いし絨氈は手製外は敷けない。肖像はキリストの外は禁ぜられている。鏡もない。寢臺、テーブル、机、箱すべてが恰好もデザインも單純である。電燈、ラジオ、電話、その他室内の小道具類は禁止されている。トラクターやそのほか多くの自動的農具も禁止されている。彼らがなぜ機械や流行に反對するかの理由は明瞭ではない。神から非妥協的な「特異な人民」であれと命ぜられたからであり、また「世間」のことに對立するからである。その特異な服裝が何に由來したかも不明である。それは世俗化の度合にしたがつて、セツルメントごとに異つている。刈込まないあごひげは既婚の男性に必須でなければならないが、口ひげは許されない。女性は決して髪を切らない。男はクェーカーのような黑帽子をかぶる。女性は教會に黑ボンネットをかぶつて行くほかは白のを用ひる。

教會の勤めは二週間毎に、冬は家庭で夏は納屋で、その地區の家族で順番に催される。牧師は互ひに神聖なキスを交す。數時間續く勤めには司教や牧師が當る。男女の席は分離されている。小さい子達はお勤めのとき連れられてくる。アーミシュ生活の從順と訓練とに入門する重大な機會と考えられているからである。聖書はドイツ語でルーテル譯である。說教はいわゆる"Pennsylvania Dutch"のドイツ方語でなされる。

アーミシュ生活の力は、彼らが比較的に孤立していること、ドイツ方言を使用し、革新を排斥し非アーミシュとの接觸を忌避していること、彼らが社會的統制を利かせていることによるだけでなく、また親密で外延的な彼らの家族生活にも負うのである。アーミシュでは子供九人を有しているのは異例ではない。親族や知友間の交際は親愛にみ

ち、しばしば相互に訪問がくり返される。離婚、遺棄、別居など稀である。

アーミシュの共同社會は各人が自給自足である。食物も衣服もともに多く自己生産されている。競走よりも相互扶助の理想と實行とが社會秩序を安定させるのに役立つている。この協力は揺かごから墓場までの非政府的な社會安定の顯著な體系を提供しているが、土地が壓縮され且またその結果として社會經濟的な副因が協力的な努力を埋沒させるときには減退する惧れがある。

彼らは農村の學校における一四歳以下の子供の普通教育については賛成しているが、初等の「書物」知識以上の教育については懐疑的である。教育を受けすぎれば、彼らの孤立が浸蝕されると信じているからである。

商業上のあらゆる形式の歡待や多くのスポーツは禁止されている。一四歳以上の若者はアーミシュの家庭における日曜の夜の「唱歌」に出席して、民謡や聖歌を歌う。讃美歌には最も古いプロテスタントの歌集である《Der Ausbund》を使用している。これらの唱歌は若者にとつては重要な感情表出の様式である。これらの唱歌は若者には、閉ぢこもり、孤立し且また嚴重に監視されているところからくる挫折や緊張からの貴いはけ口である。求愛はきわめて祕密で、夜遲く行われる。一般に會話の中で性について語ることは禁忌である。婚姻は普通には十一月か一月かに行われる。若者から既婚の狀態への推移は、ある種の行動の自由から嚴格な服從への推移である。アーミシュ的な生活の方法は、漸次に若いメンバーから懐疑的精神で觀察されてきている。一樣性、不自然な孤立、世俗生活における返報を求めないことなどの要求に對しては、すでに彼らは大きな努力を要する。

アーミシュは孤立を續け農業を唯一の職業とし、仲間の親交（Freundschaft）を守り、家庭の便宜な設備や農耕の機械化を拒否してきた。しかし、ガットキンドによれば、これらの生活樣式が今や危險に瀕しているのである。教會

の役職者や先輩がどんなに努力しても滿されない危險な空虛が生じているのである。

アーミシュは自分たちが廣大な圓形の機制で圍まれ、その中でむしろ目的もなしに社會變化の壓力に漂うているように考えている。世界の事變の進路はきまつて、終極は近い。罪を犯した人々には贖罪はない。人間のなす努力は神の意圖の潮をせき止めることはできない。アーミシュは「進歩の觀念」の持主ではなく、むしろそれを否定する。個人においてでも、集團においてでも俗世間のことに超然としている點を高く評價する。「最良の」アーミシュとはみごとに誘惑に抵抗する人であり、「最良の」アーミシュ共同社會とはきわめてその孤立を維持するのに成功している共同社會である。それでもアーシミュは必ずしも傳統に縛りつけられているわけではない。彼らはアメリカの最良の農夫に伍しているし、おそらく最初に輪作、土壤保存、肥料の使用などを試みたであろう。彼らは土を愛し農業を宗教的職業であると見ているから、役人たちの科學的忠告を「書物の農業」と名づけて反對する。しかしすでに青年層に浸入してきているアメリカの世俗文明に對し、今後いかにしてしかもいつまで彼らの宗教的傳統を維持するかが問題である。

(1) Elmer T. Clark: The Small Sects in America. Revised Edition (1937), p. 193.

(2) P. C. W. Gutkind: The Old Amish People of Northern Indiana (*Man*, vol. LIII, Aug. 1953, pp. 114-116) を參照されたい。

(二) ハッターライト

ハッターライトがヌノナイトと最も異つている點は、その宗教的コンミュニズムにある。さきにアーミシュの場合

に觸れておいたように、彼らにおいても個人の搾取的態度は宗教的歸依や嚴重な集團的訓練によつて阻止されているし、また經濟的にも相互扶助の觀念は浸透している。しかし彼らでは財の共有、《community of goods》の觀念が制度化してはいない。ところがハッターライトは聖書の精神に準じて、生産と消費との共産主義的組織を設定するのに成功した。しかし彼らはその全歴史を通して宗教上の頽廢からこの宗教的コンミュニズムを二回放棄したことがある。彼らのコンミュニズムが現代のコンミュニズムと異つているのはいうまでもない。それは宗教すなわちキリスト教的信仰を核心にしていて、同胞愛の必然的な歸結および顯現と信ぜられているからである。その目標は眞のキリスト教會の實現にある。彼らは經驗からして、世界的規模のコンミュニズムは實行されえないと考えている。

ハッターライトがハッターの名によつたことはさきに一言した。ヤコブ・ハッター（Jacob Hutter, or Huter）は一五三六年二月二六日に南オーストリアのチロルのインスブルークで燒殺されて殉教した。この教派はアナバプチストの團體で最も古いスイス・ブレスレン——その設立者はグレーベル（Conrad Grebel, c. 1498–1526）である——から派生した。チロルのブリュネクの近くセースでブレスレンの一集團の牧師をしていたハッターは仲間からモラヴィア（當時はオーストリアに屬していた）のブレスレンを訪れて忠告をするように要求された。彼はその名のごとくもと帽子作りを營んでいたが同心してアナバプチズムに獻身した。彼は信念の固いしかも深く宗教的な人物で、強い意志力とともにすぐれた組織力を有していた。ハッターはモラヴィアのオーステルリッツに赴いて、その地のブレスレンとチロルの仲間とを教會に結合させた。彼が歸つてから、オーステルリッツの教會が分裂して、嚴格な一派の一五〇名は一五三一年にアウスピッツという部落に移動した。再びチロルから訪れてきたハッターは一五三三年にアウスピッツの教會の首席牧師に選ばれた。彼とその助力者たちの努力で嚴格な訓練と秩序とが、殊に「財の共同社會」を

尊重して設定された。それから二年後、オランダでメノ・シモンスがカトリック教會を拒否した頃に、彼は殉教したのである。

當時はキリスト教國のどの國家でも教會と國家との密接な連合を計つていた。そしてカトリシズムにおいてもプロテスタンチズムにおいても、支配的な教會に歸依しない者は迫害した。原則としては、どの國でも支配者の信仰している教會の信條だけを寛容したのである。アウスピッツの領主などは、信仰を異にする信者たちが同じ市民政府の中で共存しうるという全般的寛容の政策を採つた稀な支配者の一人であつた。しかしながら、時潮は國家＝教會主義(state-churchism)の原則を拒否し幼兒の洗禮を否定するいわゆる邪教のアナバプチスト殊にハッターライトに幸ひするわけはなかつた。すでに一五二九年のジュピーアの國會は勅令をもつて再洗禮を極罪ときめていたのである。諸侯がハッターライトに寛大であつた主因は、彼らから莫大な利得をえたからだといわれている。しかしミュンスターにおける大反亂は、それに直接の關係のないハッターライトにも影響して一五三五年の大迫害となつた。その後、少しく平和と安息の時期が續いたが、ついに一五八四年に苛酷な迫害が再び行われた。その當初にはハッターライトは二六のセツルメントまたはコロニー(Brudenhofs)をモラヴィアに有していたが、すべてが驅逐され、ハンガリアに亡命した。しかし數年後にはモラヴィアに歸つて各地でセツルメントを作ることを許された。モラヴィアはアナバプチストが最も宗教的自由を享受した地區である。そこで一五五三年からは「教會にとつて惠まれた時」を過すことができたし、一五六三年から一五九二年まではほとんど迫害を蒙らなかつた「理想期」であつたといわれている。この時期には、モラヴィアおよびハンガリアの若干地點において、四〇から五〇の共同社會(Brudenhofs)を有し、一二、〇〇〇から一五、〇〇〇の信者を擁していた。

一五九三年にトルコとオーストリアとの間に戰爭が起り、モラヴィアのハッターライトは軍隊に惱まされた。兵士たちは久しく彼らの家に宿つて勝手に飲食した。また領主や貴族たちは過當な稅金を課しまた無一物のまゝ放逐などして苛酷な暴政を行つた。そして一六〇五年にはトルコ人や韃靼人、あるひは聯合したハンガリア人が侵入してきて三ケ月のうちに一六以上のセツルメントが破壞され、八一名が虐殺され、二四〇名がトルコに奴隷として連れ出された。しかし、このときもその後の戰爭でも、人々は無抵抗の原則を堅持した。一六一八年には、カトリック信者のフェルディナンド王に對するボヘミア人の反亂の結果として三十年戰爭が勃發した。それはプロテスタントとカトリックの諸國家の死鬪に展開した。モラヴィア政府はボヘミアと連合し、ジェスイト教徒を追放した翌年に、フェルディナンド王の軍隊はハプスブルグ家から離脫したのを罰するためにモラヴィアに侵入した。そして二ケ月間に殘餘の四〇のうち一二のセツルメントを徹底的に破壞し、他の一七を掠奪し荒廢させた。そして四〇名が虐殺された。一六二〇年から翌二一年には、侵入軍からの筆舌につくしえない暴虐に耐えた掠奪と迫害は續いた。多くの者が虐殺された。しかも戰爭の後には疫病が發生した。そして一ケ年に三分ノ一の信者が死亡したといわれる。

ハンガリアのハッターライトは、トランスシルヴァニアの攝政ベトレン・ガゴルの代表から同國のアルウィンツに農奴としてでなく自由人として植民地を與えることを申込まれたが、快諾しなかつたので强制的に初めに八四名ついで一〇一名が連れられていつた。そして翌一六二二年にはカロリナ女王からセツルメントを許可された。このアルウィンツのハッターライトは、一八世紀の後半に政府の支持をえたジェスイト派がハンガリアのあらゆるハッターライトの組合を壞滅させた時、父祖の信仰を保持した。ハンガリアに止つていた信者は掠奪と疫病と飢饉に惱み續けた。

このハッテリアニズム（Hutterianism）の初めの半世紀には、その共同社會は信者の協力によつて順調に發展したが、この理想的なキリスト教的生活も一六世紀の終り頃には衰頽し始めた。雇傭關係からくる勞力と給與の不均等など種々の問題が生じた。さらに三十年戰爭や相つぐトルコ戰爭によつて事態は悪化した。そして一六六三年と翌六四年には、ハンガリアの若干のセツルメントの建物はトルコ人や韃靼人に破壞され、少くとも一二二名が奴隷として連れ去られた。一六七四年にはジェスイト派が官憲の支持の下でハンガリーの信者に幼兒洗禮を强要したが成功しなかつた。それでも一六八八年にはハンガリアのレヴアルの信者の一部はこれに同意した。一七二五年には、同地の信者が幼兒洗禮を拒否して一五名が投獄され、同年に屈服した。一七三三年には、サバティシュにおいても、信者が屈服した。しかし後には告白して再び洗禮された。

一六八六年に、レヴアルの仲間は、ハッターライトの重要な特色である財の共同社會を廢棄する決意をした。少し後に、他の組合でも同じ行動に出た。直接の原因は、仲間の極貧と窮乏とにあるといわれるが、しかし彼らは以前には大迫害と飢饑に耐えてきたのである。精神的な弛緩と頽廢とが主因である。キリスト教的愛の精神と眞實の同胞意識とが、彼らの協同社會から衰微したのである。それでコンミュニズムの實行は困難になりついに不可能になつた。怠惰な人間が續出し、人々の良心は痲痺した。しかし、腐敗した虚僞の信者を清算して、篤信の仲間の再建設もありえたわけである。

ハンガリアではカトリックの女王マリア・テレサの贊成をえて、ジェスイト派の大迫害が一七五九年の終りから漸次に展開された。ハッターライトの中からも棄教してカトリックになる者が續出し、まさに總崩れの觀を呈した。一七六二年から、迫害はトランスシルヴアニアのアルウィンツでも行われた。ついで二五哩離れたクロイツでも行われ

た。彼らは苦心してルーマニアのワラキア地方に亡命した。この地方はロシアとトルコとの戰爭で、ロシア軍が占領したのである。

ワラキアのハッターライトはサメーティン將軍にロシアへの移住を嘆願した。彼らは荷車と必要なパスポートを與えられた。一七七〇年の四月に出發し、モルダヴィアでロシアの陸軍元帥ロマンゾフ伯に會見して、ウィシェンカの領地に入植する契約を結んだ。宗教的自由は保證された。そして旅費も與えられた。人々はウィシェンカに一七七〇年の八月一日に到着した。そこで彼らはすぐ非常に繁榮した。陶器、織物、金物細工などの工業も發展した。そして翌七一年七月二〇日に再び同じ屋根と同じテーブルにつくことができ、二四日に新築の家屋で初めて說教が行われた。ついで一七七八年には小、中學校が建築された。一七七二年末に、トランスシルヴァニアの牢獄にあつた信者はすべて釋放され、翌年の正月にはウィシェンカに到着して仲間から大歡迎を受けた。一七八〇年、オーストリアではマリア・テレサが死んでジョセフ二世が即位してから宗教上に寬容になつたとの噂が傳つてきたので、二名の信者がハンガリアに行くことになつた。彼らはレヴァルにいる仲間であつた背教者を訪れたが、人々はハッターライトの同胞が未だ生きていたとは信じえなかつた。そこからコリンティアにも赴き、背教者の親籍や仲間に大歡迎を受けたが、アナバプチストはすでに非常に輕蔑され嫌われていていることを知つた。その後、繰返しウィシェンカからハンガリアに使者を出したが、彼らの努力は空しく再び改宗させえなかつた。一七八二年の夏、サバティシュのヤコブ・ワルターから、サバティシュやレヴァルにはもとの信仰に復歸したい者が多いから援助にきてほしい旨の書狀が屆いた。二名が急行したが、何事もなしえなかつた。寬容の敕令にはカトリック、ルーテル派、カルヴィン派、ギリシヤ正教徒しか含まれていなかつたのである。ワルターは翌年にロシアに逃亡した。その後數年に五五名がレヴァルとサ

バティシュからロシアに逃命するのに成功したが、ほかの多くの者は捕えられて連れ戻された。

ロマンゾフ伯の子は、ウィシェンカにいるハッターライトを農奴に格下げしようとしたが、嘆願を受けた皇帝アレキサンダー一世は一八〇一年五月の勅令で、領土内に止つて、プロシャから移住してきているメノナイトと同じ權利と特權とを與えられると宣言した。それで彼らは三二年間住んだウィシェンカから一五ベルスタのレディチャワに移動した。そして學校を建築し、說教場や仕事場も新設した。產業には織物、製陶、仕立、製靴、旋盤細工、製帽、製革が含まれていた。彼らは水車や風車も設備した。しかし、いさゝか生活が安定するとともに精神的頽廢が生じ初めた。加うるに牧師の間にも不和が起つた。そして一八一九年には財の共有の實行は廢止された。教派は窮乏に陷つた。彼らの求めで、ロシアにいるドイツ系のメノナイト植民地の指導者であるヨハン・コルニースが忠言してモローチュナ河の沃土を獲得するのに助力した。その結果、一八四二年に全セツルメント七八家族がその地に移動してハッタータル（Huttertal）という村落を構成した。ついで一八五三年には第二の村落ヨハネスルー（Johannesruh）が建設された。また一八五七年には二つの村落（Hutterdorf と Neu-Huttertal）とが新設された。そして再び繁榮した。一八五三年の春、ハッタータルの三三家族が「財の共同社會」を再建しようとしたが、失敗した。一八五九年に、ミカエル・ワルドナーが數家族で、ついで翌年にダリウス・ワルターが同じく舊派の同胞團（Bruderhof）を作つた。それでモローチュナ國に二つの共產主義のセツルメントができたのである。

しかし、ロシアにおけるハッターライトは、政府が軍隊と政府とへの勤務を免許することを撤退するに及んで、さきの二つのセツルメントとほかの組合などは、一八七四から一八七九年にアメリカ合衆國に移住した。そして現在のサウスダコタ州に定着した。一八七四年に最初に移つてきたのはおよそ二五〇名で、大部分が舊派の共同社會生活を

決意した。彼らはネブラスカ州境に遠くないところにボノム（Bon Homme）とウーフ・クリーク（Wolf Creek）とに二つのコロニー（ブルーダーホフ）を作つた。一八七七年には、さらに一七家族が渡來して、エーム・スプリングに（ブルーダーホフ）を作つた。他の集團は一八七九年に移住してきた。一般にロシアで財の共有性を維持していたところのハッターライトはダコタ州でもこれを繼續し、これに他の者も參加した。そして移住者の半數は「ブルーダーホフ」に定着したといわれている。人口の增加とともに、新らしい土地を入手して、新らしいコンミュニズムのセツルメントが建設された。

第一次世界大戰では、熱狂的な地方の愛國主義的官僚や人民から、四世紀も遲れたその無抵抗主義を依然として堅持しているのを攻擊された。戰後に、三つを除くすべての「ブルーダーホフ」は、軍務からの完全な自由を政府から約束されたカナダのマニトバとアルベルタに移動した。一九三一年の中期には舊派のハッターライトは三、四八三名と記錄されている。なおほゞ同數のハッターライトの子孫が、サウス・ダコタ、ノース・ダコタ及びカナダのサスカチェワンにいくつかの組合を構成している。これはハッテーリアン・メノナイツ（Hutterian Mennonites）として知られている。ほかに他のメノナイト集團に合一されたのもいる。[1]

イートンによれば、一九五一年の夏には、約八、七〇〇のハッターライトがアメリカとカナダで九三の集落、彼らのいわゆるコロニーに分れて生活している。彼らは大部分が一八七四年から一八七七年にかけて移住してきて三つの村落に定住した約五〇家族の子孫である。若干は改宗して加入したのもある。[2] わたしはかつてディーツの學位論文『ハッターライト』（Lee Emerson Deets: The Hutterites; A Study in Social Cohesion, 1939）が刊行されたとき、この教派の社會學的研究に非常な興味を抱いたことがある。たまたま昨年の春、アメリカを視察する機會を與え

られた際、福岡の副領事スミス（Mathew D. Smith, Jr.）氏に會見したとき、氏の故郷サウス・ダコタに共産主義的な教派があることを聞き、デーツの著作を回想して、ハッターライトでないかを質したら、然りとのことでさらに關心をそゝられた。スミス氏の父君はダコタ・ウェスレイアン・ユニヴァーシティの總長で、その所在地であるミチェルの附近にも、ハッターライトの集落のあることを知り、見學することをプログラムの中に組んでおいた。そしてシカゴから汽車で、スー・シティーでローカル線に乘換えサウス・ダコタに赴いた。この地方は平原でほとんど山を見ず、車窓から眺める畑地には雉が多い。それで「雉の國」といわれる。主としてトーモロコシとポテトを産出する。到着したミチェルは「雉の國の心臓」である小さな町であつた。わたしは同大學のボーマン（Melvin W. Bauman）教授の厚意によつて待望のハッターライト集落を見學することができた。

五月一九日（水）。ボーマン教授の車に岡村富美子孃と同乘してミチェルから東南二七マイルのニュー・エルム・スプリング（New Ulm Spring, New Elm Spring）—Hutchinson County に屬する—に赴く。すでにその地で教師をしているチェッター（Levi Paul Tschetter, Jr.）氏に連絡してあつたので、車を停めるとともに、目の鋭い素朴で矍鑠たる老人が招く。こゝの牧師チェッター（L. P. Tschetter, 1884——）氏である。彼はこのコロニーの牧師であるとともに靴屋である。その仕事場に入つてみると靴、革、靴墨などが澤山置いてある。こゝでは黑靴しか使用できない。革や靴墨は購入してチケットで配給する。

このコロニーは一八七四年ウクライナから來た者の子孫で、チェッター老はこの近くのフリーマンとかで生れたという。ロシアから移住してきた仲間が今でもそこにいるという。カナダにもいることがわかつた。こゝよりも強制がない。こゝでは最初は迫害された。政府もいぢめたし、近所の人々から水に投げ入れられたと。この老牧師に

よれば、開祖ヤコブ・ハッターはオーストリアのインスブルークで一五二九年頃に迫害され燒殺された。開祖は使徒行傳二章、に示されているように、キリストと聖靈降臨祭とを中心に考えていた。このコロニーは現在一三一名で、家族が二〇であるから、男女二〇組とその子達ということになる。見たところ小さい女の子が多い。黑いボンネットをかぶつて柔しく可愛らしい。

老牧師の案内で廣い果樹園や蜜蜂の飼育場を見る。鷄や七面鳥の雛を飼つてある大きな小舍がある。驚くべきマス・プロダクションである。卵も夥しく生産されている。すべてミチェルに賣出して、代りに必要品を購入するのである。家は共同長屋も獨立のもある。大納屋や車庫もあり、トラクターが四臺もある。樹木に點綴されていかにも桃源境の趣きがある。耕地は四、〇〇〇から五、〇〇〇エーカーで、主にトーモロコシとポテトを栽培している。家畜は約五〇〇、最近では馬はあまり必要でなくなつたという。一つの教會は學校と兼用で、禮拜堂がまた教室である。場内の机のあちこちにドイツ語のバイブルが置いてある。老人と若人と二人の牧師がいる。受洗者は一五歳位の者もあるが概して一八歳位の者が最も多く、それ以上の年齢者もある。日曜は休息日で、朝と晩とに禮拜を行う。臨終のときには、要求すれば牧師が來てくれる。息子である三十五歳位のチェッター氏が四〇名ほどの學童の教育を擔當している。男女共學である。彼は師範學校の出身である由。その語るところによれば、一九三九年のディーツの著作に記されているのと、現在異つている點は、教派の人々の現代の機械に對する接近である。

われわれはキッチェンと呼ばれている食堂の一隅で皆と同じ中食を饗應された。そこでは男女とも質素で古風な服裝をして默々と食事していた。子供は加わつていない。獻立は鷄の燒肉にスープとパン、牛乳とコーヒー、なかなか量が多い。食後の菓子もある。終れば女性の當番が後片づけをしている。

チェッター父子ともに傳統のまゝあごひげを生している。老人は好奇心が強く色々なことを質問する。ドイツ語はもちろんロシア語、フランス語、それにインディアンの言葉も知つているとアメリカ語で自慢していた。この親にして初めて教育に携る息子が出たのであろう。この老牧師は日本人が全能の唯一神を信じていないのを不思議がつていた。しかし彼には佛陀も佛教も未聞であつた。別れに臨んで、若いチェッター氏は新らしく部屋にペンキを塗つてあるので内部に案内できないのを氣毒がつたが、入手の困難な『ハッテリアン・ブレスレン』(John Horsch: The Hutterian Brethren, 1528-1931. Goshen, Indiana, 1931) を惠贈してくれた。

それから大學に歸つて、生憎豫定していた人が行けなくなつたので再びボーマン教授を煩わせて二四マイル以上のローズ・デール・コロニー (Rosedale Colony) に赴く。牧師の人を尋ねて、若人に教えられるまゝに顔にネットをかぶつて蜜蜂の箱の手入れをしている老人のところに至る。ワルドナー (Joe M. Waldner, 1894——) 氏である。太陽の直射——サウス・ダコタは《Sunshine Country》とのニック・ネームがある——で暑い道端で話していると、自宅に來いとのことで出掛ける。この父子二人が牧師である。氏には子供が一五人あり、現在は男二名、女二名が家に同居している。二階の女子の部屋には造花のバラなど飾つてあつて小奇麗である。一五歳になれば各人が大箱を與えられ、これに身廻り品を仕まつておく。

この牧師はボノムの生れである。こゝローズデールは初めからそう呼ばれているが、バラの花があつたかは不明であると。現在、一五家族で、人口は約一〇〇、しかも一六歳以下が四〇人ほどいる。耕地は四、〇〇〇エーカーあり、牛が約二六〇頭で羊がおよそ一〇〇頭いる。以前には馬が澤山いて、柵が作つてあるが、現在では勞働が機械化してきたので約三〇頭に減つている。

こゝでも教會とパブリック・スクールとは同じ建物である。教師は六年前にスー・フォールス（Sioux Falls）からきた長老派の六四歳の老人であるが、立派な人物だとほめていた。二八名の兒童を教育している。洗禮は本人の記憶力が強ければ希望によつて一八歳から二五歳位の間に牧師が行う。ドイツ語を教え、ドイツ語で說教する。老牧師は使徒行傳の一章から一〇章に亙つて自分たちのコロニーについて記してあると語つた。この牧師はなかなかの學者であり、またこのコロニーの日記やドイツ語の大聖書など所有している。カナダの Winniped で印刷された《Die Lieder der Hutterischen Brüder. Gesangbuch》の一九一四年の初版や五三年の再版などもある。自ら製本をやるといつているが、非常に巧みである。ドイツ語とともにチロルの方言も話せるという。われわれは戰爭には絕對に贊成しないと。またもし他のコロニーが困つていれば、無償で助力してやる、同じ教會の人であるからといつていた。

附近に六つのコロニーがあるという。ヒューロン・コロニーが二つ、フランク・フォート、ウイコタ、イロコイ、ミラーデール（ミラー・コロニー）がそうである。またヤンクトン郡のユティカにはジェームス・ウェル・コロニーがあると。その家を去つて、このいわばユートピアの集落を見學しているとき、黑い服裝の巨人に紹介された。彼のことをボス（boss）といつていた、牧師と異つてコロニーの實務を責任持つマネージャーである。

われわれは歸途、そこから數哩離れたロックポート・コロニーにも立寄つた。外でトーモロコシの皮をむいている婦人たちが會釋していた。こゝには澤山の豚が飼育してあつた。人口は一五〇名以上とのことであつた。

この宗教的コンミュニズムの濃い色彩を帶びているハッターライトは、邪教とみなされて多くの迫害と壓迫とを蒙

つたにもかゝわらず、現在コロニーを作つて《community of goods》として生存している者だけでおよそ九千の小教派として存續している。彼らは四世紀以上も生き續けた。それはヨーロッパやアメリカで宗教的または社會主義的立場からより良い社會的秩序を創造しようとした數百の理想社會のおそらく最初でしかも現存している最古のものである。彼らの建設している共同社會、ブルーダーホフ、コロニーは眼を外の俗世間に向けないモナド、あるひは一種の小宇宙であつて、彼らはその中で物心ともに集團的安全を獲得している。かつてディーツは、彼らの間では、社會または自らに背いた犯罪は極めて稀で、離婚は未知であり、この社會のメンバーは大部分が法外に心的健康を有し心的葛藤や緊張から免れていると記した。そこでは家庭の喧嘩はないし、喧嘩そのものが稀有である。自殺は行われたことがない。精神病はほとんど存在しない。われわれの社會には見出されるような慢性的な神經的不安はほとんど無い。その社會は無階級に近い。ハッターライトは成功のための闘爭に煩わされないし、失敗感に襲われて萎縮することもない。經濟的にみて、成功、不成功は彼らの生活樣式の部分を構成していない。寂寥と友の無さは實際に知られていない。死でさえもが永劫の未來生活への推移にすぎない。心的葛藤の源である知的な課題をもつているハッターライトは少い。宗教上の眞理は絶對である。われわれの社會に比して、ハッターライトの共同社會は、變化の川の中の確實と安定との島であると。(3)

もちろん最近の實地調査の報告は、ディーツが記しているほどには collective security を有しないし、社會的凝集力も弛緩してきていることを指摘している。(4) この保守的な小教派もアメリカ文化の圏内にあつて文化變容を餘儀なくされるのも當然である。また大迫害を受けて心身ともに痛苦にさいなまれた長い歴史を持つ限定された數の祖先から繁榮した現在の新大陸のハッターライトが心的疾患に惱まされていないというのは速斷である。しかし、彼の特筆

したようなハッターライトの性格的な傾向は見逃しえないものである。

アメリカのハッターライトは主として牧畜を併用した農業主義に立脚している。そしてHutterianismは共同社會を中心にした宗教である。人々は神から唯一の眞のキリスト教的生活を營むために選ばれた民であると信じている。その農業經營はかなり廣大である。その自然的物理的環境は彼らの宗教的信念と容易に調和しうる。彼らは自然は神の創造し給うものであり、都市は人間の建設したもので、惡魔の城下であると考える。彼らは自然と密着して生きる悦びを感じている。彼らのコロニーが都會から隔離されたところに存在していることが、集團の傳統的な結合力を維持しえた一因である。彼らの共同社會は宗教的にも經濟的にも同質の集團である。ともに幼兒から同質的な群居的生活を續けている。各自の家庭といえども必ずしも私的ではない。相互に訪問し合う常に開放されている家庭である。それで人々はそのコロニーから離れることに一抹の恐怖心を抱く。

彼らは惡に對する無抵抗主義からして絶對の非戰論者であり、平和主義者であり世俗から超然と隱遁して簡素の生活に徹して神を崇拜する禁欲主義者である。彼らは個人の良心をあくまで尊重するアナバプチストとしての個人主義者であるにもかゝわらず、その社會組織は徹底したコンミュニズムである。その同質的共同體はさらに、一世紀以上に亙る集團内の婚姻によつて強化されている。彼らの集團は親類によつて構成されている。

ハッターライトはさきにも述べたように世俗的な高等教育を輕視しているが、しかし自分らの宗教的信仰を強化し透徹させるための宗教教育はこれを尊重して、幼兒からその雰圍氣にひたらせて指導することを等閑に附しない。

ハッターライトは、その傳統的な強い價値體系である信仰主義を固執してはいるが、經濟的分野では必ずしも進歩したアメリカの機械化された農業から遊離しない。トラクターその他の新らしい農器具を採用し、家畜や家禽の飼育

にも近代化を計つている。この點ではあくまでも反機械主義的な舊派アーミシュとは異つている。

イートンは、ハッターライトのもつ特徴のうち七つを特記している。(1)家族は生殖的及び主情的な機能を司るにすぎない。經濟的支持、食物の用意、およそ三歳以上の者の教育などは共同社會の責任になつている。(2)財産と勞働の生産力を分配する共有的體系。(3)經濟的らびに精神的の高度の保定性。(4)原初的集團型の社會關係の優越。（コロニーの大きさは二〇〇名を超えない。）(5)出産率が高い。一九五一年では一家族は平均して一〇人の子供をもつている。(6)基本的には「階級なしの社會」であるから威嚴の變異（prestige variations）の差は少い。(7)絶對的な價値體系をめぐつての積分化。その文化はいわば「全體主義的」である。彼らは暴力を振うことを極端に怖れ、アナバプチスト型の人道主義の原則に獻身する。

ハッターライトの共同社會にも、殊にイートンが指示しているように內部からも外部からも文化的變化が生じている。彼らが個人的イニシアチヴを欲し、故老から見た贅澤品の使用にも心惹かれていることは事實である。その峻嚴な單純生活の中においても、ある程度、葡萄酒やビールなどの飲用が認められてきている。しかし現代アメリカ文明への無條件の文化變容が許されているわけではない。それはイートンのいわゆる「統制された文化變容」(controlled acculturation) である。この文化は他の文化を受入れても、現存している價値體系に新らしい實踐を積分するのである。この文化變容の詳しい事實とそのとつている方向とについては稿を別にするほかにはない。もし極論が許されるならば、現代の若いハッターライトは一種の《marginal men》といえるであろう。しかしながら、二〇世紀後半の機械主義の先端を行くアメリカ大陸の內部における、この一六世紀起原の保守主義のキリスト教的小教派の存在は、アーミシュのそれとともに、宗教的價値と信仰との鮮明な證明である。

(1) この歴史的敍述は主に John Horsch; The Hutterian Brethren 1528–1931. A Story of Martyrdom and Loyality Goshen, Indiana, 1931 によつた。Marcus Bach; The Dream Gate. N, Y. & Indianapolis, 1949 は未だ入手できないのであるが、紹介文によれば、著者はアメリカにおいては共産主義的または相互扶助的な共同社會、いわゆるユートピアの建設が試みられ、一四九の實驗はすべて失敗し、たゞ一八七四年に初めてこの國にきたハッターライトだけが成功しているといつている。著者はこの孤立した Communes（八つがサウス・ダコタ、二つがモンタナ、およそ三〇がカナダにある）を研究して、約六、〇〇〇の信者が「コロニーにつき平均數約二〇〇名づつ、私有なしに、また贅澤品や娯樂なしに、「一人の快樂のためよりも全體の善のために」結合して生活しているのを注目している。

(2) Joseph W. Eaton; Controlled Acculturation: A Survival Technique of the Hutterites (*American Sociological Review*, June, 1952) 但しこの統計は後に R. J. Weil との共同執筆になる The Mental Health of the Hutterites (*Scientific American*, Vol. 189, No. Dec. 1953) では少しく違つていることを附記しておく。この實地調査の報告論文はハッターライトの中にもかなりの精神病者、神經症者が存在していること、その類型、および共同社會内における異常者の取扱ひ方法などを知らせて興味が深い。

(3) イートンは殊に前掲の論文で、ディーツの調査した一九三〇年のハッターライトと一九五〇年のハッターライトとの間では現在では彼ら自らの衝動とアメリカの相剋する諸價値との間においての闘爭が激化している點を强調している。

(4) L. E. Deets: The Hutterites, p. 2.

追記

わたしはハッターライトのコロニーを訪れた直後、グード氏がアーミシュについて調査した不完全文章による質問法に準じて學童の記入を依頼しておいたが、岡村富美子孃の斡旋によつてつい最近に到着したので、そのおよその結

果を纏めて報告しておく。

左記のような四〇項目の不完全文を自由連想によつて補わせる。その記錄を整理して、こゝでは特にハッターライトの社會的凝集力が兒童においてどのように變化しているかを瞥見するのに主眼を置いた。被調査者はわたしが訪れた New Elm Spring の學童であるが、落手した回答者數は十八名である。このうち男は六名、女十二名。年齢は八歳男二、女一、九歳男女各一、十歳女六、十一歳女二、男一、十二歳男女各一、十三歳男女各一名である。

1. I like 2. The happiest time 3. I want to know 4. I feel 5. I wish I hadn't 6. May mother 7. I am very 8. I don't like 9. My geatest fear 10. God 11. In town 12. Automobiles 13. I hope 14. My sister 15. I can't 16. School 17. Movies 18. My father 19. Kissing 20. I never want 21. Mennonites 22. Girls 23. When I grow up 24. Money 25. When I do something wrong 26. The people in town 27. Prayer 28. I need 29. The Hutterites 30. Radios 31. My brother 32. Boys 33. Dancing 34. Marriage 35. The best 36. I never tell anyone 37. Work 38. My minister 39. At home 40. People ought to be

(1) については、兩親、兄弟姉妹、ことを好むという者八、友人二、學校二、唱歌二、遊戯二、等となつている。ハッターライトでは唱歌はすゝめられている。

(2) 最も幸福な時は、クリスマスまたはその前夜であると記しているのが壓倒的で一五、町に行つたときというのが二、旅行というのが一となつている。

(3) 私は知りたい、これは色々に分れて答えられている。神について、正邪について知りたいというのが各一、

祕密を知りたいのが二名、等である。

（4）わたしはhappyまたはgoodと感ずる者一三、雪降りを期待して悦ばしいという者一、unhappyまたはbadという者各一、兄が家出したので悲しいという者一、目がくらむ者一名。子供たちがこの孤立した共同社會で滿足していることが推定される。しかし兄弟が家出する、いゝかえればこの共同社會から永久に追放されるのを覺悟して脱走する者のあることが注目される。

（5）わたしはしなければよかつたという中には、母のキャンデーや姉の香水などを盗まねばよかつたというのや窓などをこわさなければよかつたというようなのがある。

（6）わが母はgoodというのが七、働いているまたは忙しいというのが五、キッチエンのボスと記しているのが一。キッチェンとは共同食堂のことであるが、ここの台所の女マネージャーすなわちボスはこの部落全體のマネージャーの妻であることがわかつた。

（7）わたしは非常に疲れたというのは二、幸福というのが五、わたしは非常に小さいまたは大きいというが各一で、親切である、忙しいというのが各一名等。

（8）わたしは好かない、このうちで熊を嫌う者三、アイスクーム嫌ひ三、菓子一、荒天または雪雨二名、犬または狂犬二、敵二、嘘の話一などがある。

（9）わたしの最大の怖れは、亡靈という者三、地獄一、闇二、暴風雨または雷、旋風が三、熊三、大犬一、雄牛一、大きな動物または野生の動物二、人さらい一などである。（8）の回答とも對照して熊が最も怖れられている。

（10）神。天に在すと記す者二、神を愛すという者三、われを愛すという者一、善良であるという者四、人々また

は善良な人々に對し善良な友という者三、われわれに親切である、われわれを幸福にしてくれるという者各一、力强い王、善良な人間であるという者各一、われは神なるかという者一である。

(11) 町には、美しい人形あり二、ほしいもの良いものがある二、町が好き二、嫌ひ二、等である。

(12) 自動車の殊に速い乘物であるのに對するあこがれは强いようである。たゞし人を殺すという者四。

(13) わたしは望む、天國に行きたい二、クリス・マスの贈物またはカード二、町に行きたい者二、アイスクリーム二、ラジオ一。クリスマスまで死にたくない、木から落ちないように、こんな質問にまた答えたいというのもある。家出した兄たちがすぐ歸つてくれるとよいというのもある。

(14) わたしのシスターは「グッド」わたしに親切であるが五、ノーグッド三、怒る、ほかの土地に住んでいると答えたのが三つ四つある。町に出ている者がかなりいるらしい。

(15) わたしは出來ない、には、仕事、着物作り、皿洗ひ。あるひは文字の綴りが出來ないというのがある。母に嘘がいえない、人を馬鹿にできないという者各一。

(16) 學校はよいところであり、好きだというのが大部分である。最上のものではないという者がたゞ一つあつた。

(17) 映畫。これは好きな者三、嫌ひは三、價値なしまたは少し五などである。

(18) 父。グッドという者八、あとは今日町に出掛けた農業で働いている等である。父はマネージャーである說教師であるというのもある。

(19) キッスは嫌ひ、よくないという者に對し、大部分は fun と記している。

(20) わたしは叩かれたくないというが三、地獄に行きたくない、軍隊に入りたくないというのが各一、犬が欲しくないというのが三、雄牛に近よりたくない一、映畫に行きたくない、ジャングルに入りたくない各一、などである。

(21) メノナイトはよい人達だというのが壓倒的に多く、良ないというのが二。ハッターライトに對してよいと記した者一。よく働くと記したのもある。

(22) 女の子は好きだ奇麗だというが男女ともに多い。よくない、嫌ひだというのが各一。

(23) 生長したら、キリスト教徒になる。神に屬したい、立派な人になるというが各一。こゝにいる、カナダに行きたい、先生になる、自動車を運轉する等である。

(24) 金。結構だ役に立つ重要だと記すのが最も多い。Money all と記しているのがある。よくないというのが二、その他である。

(25) 何か悪いことをしたときには、神の許しをうるために祈る、祈りたくなるというのが四、そのほかはうれしくない、悲しい、やり直す、あるいはなぐられるなどと回答されている。

(26) 町の人々はよいまたは悪いが、大體で相半ばしている。醜いというものもある。美裝しているというのもある。われわれほど健康的でないとも記されている。

(27) 祈り。祈りはよくない一、知らない二を除いては大切だよい好きだが多數を占めている。

(28) わたしは何々が必要だの回答は多岐である。抽象的に助けが必要だというのは三、祈りを必要とする者一。

(29) ハッターライトはわれわれであると答える者が過半。よい人々であり人を愛する、神にとつてのよい友と答えている。ハッターライトは一つの宗教集團であると答えたのもある。

(30) ラジオ。好き、面白い、ニュースが聞けるという三を除いては、すべてがラジオを忌避している。よいが、持つことは許されていないという者もある。興味を持たれていない、許されていない、よくない、嫌いだというのが絶對多數である。

(31) ブラザーは大半が好きだ親切だと記している。

(32) 男の子は女子と違つてよく働かねばならぬというのが多い。女子には、嫌ひだと記しているのがある。

(33) ダンス。よくない、興味をもたない、ダンスしたことなし、無用であるというのが大多數である。好き面白いというのが二。

(34) 結婚。幸福である、大人にとつて幸福であるとするのが大多數である。ノーグッド、好まないというのが各一。

(35) 最上のものは、神、クリスマスが各二、The best friend is God と記したのもある。アイスクリーム二、旅一などである。

(36) わたしは決して祕密を語らないというが四、母のことを告げない二、等。

(37) 勞働。健康的だという者四、好きだ結構だ面白いという者八、辛い、よくないという者五、等である。

(38) 牧師。善良であるという者が多い。牧師は説教師であるという者三。Sam Wallman 氏の名を記す者二。

(39) 家にいるのはよい好きだが六、家では遊び唄う三、働かねばならないという者二。ニュー・エルム・スプリングにいるのは at home だというのもある。

(40) 人々は親切で善良でなければならぬというが大多數である。

ハッターライトは産兒制限などは行わないせいもあつて、現在若い男女が殊に多い。十八の被調査者が記している兄弟および姉妹數は、（1）男七、女一（2）男六、女二（3）男五、女四（4）男二、女（5）男五、女三、（6）男二、女五（7）男〇、女二（8）男六、女三（9）男四、女六（10）男六、女三（11）男四、女三（12）男三、女三（13）男六、女五（14）男三、女一（15）男三、女三（16）男六、女三（17）男五女八（18）男四、女二である。兄弟姉妹が澤山同居しているところでは、相互の心的緊張が見られるわけであるが、回答に現われている限りでは親密であると見られる。

全體を通して、ハッターライトの最も強い機械文明に對する抵抗が、兒童においてはラジオの場合によく窺える。回答にはひろく兒童心理の問題について興味あるものが含まれているが、これは省略した。